

認識と価値形成

——企業と人間の進化の問題の基礎——

(二)

笠原俊彦

3. 狭義の価値とその形成機構

3-1 広義の価値の要素としての狭義の価値と価値形成機構

わたくしは、広義の価値を対象観念と狭義の価値との結合として理解した。対象観念と狭義の価値とは、ともに広義の価値の要素であり、両者は結合して広義の価値を構成する。

この場合、われわれが注意しておかなければならないことは、対象観念だけでなく、狭義の価値も、また、一つの観念だということである。狭義の価値は、通常、われわれが何らかの対象観念に何らかの価値があると思ふときに成立するのであり、したがって、それは、やはり、われわれの心理的産物である。この意味で、それは、対象観念と同じく、一つの観念としての性質をもつ。

このことから、わたくしは、狭義の価値を、狭義の価値観念と呼ぶこともできる。もつとも、わたくしは、便宜上、とくに必要でない限り、この呼称を用いることなく、それを、ただ、狭義の価値と呼ぶことにしよう。

わたくしは、対象観念を説明する際、観念という言葉に、われわれの意識の産物のみならず、われわれの無意識の産物をも含めたのであるが、観念という言葉の用法は、ここでも同様である。すなわち、わたくしは、狭義の価値観念ないし狭義の価値に、われわれの意識の産物だけでなく、われわれの無意識の産物をも含めることとする。

それだけではない。われわれは、狭義の価値が、対象観念と同様、われわれ人間についてのみでなく、有機体のすべてについて存在する、と考えることにする。もっとも、この場合、以下の考察の中心をなすものは、いうまでもなく、われわれ人間の狭義の価値である。

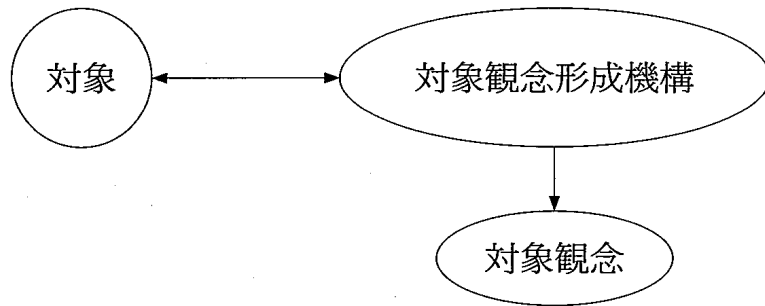
われわれの狭義の価値は、対象観念と同じく、われわれの経験において形成される。そして、このような狭義の価値の形成についても、われわれは、われわれのうちにあつて、狭義の価値の形成を可能とする機構を想定することができるであろう。この機構を、わたくしは、狭義の価値形成機構あるいは簡単に価値形成機構と呼ぶことができる。そこで、狭義の価値は、われわれの経験において、われわれの価値形成機構によって形成されるのである。

この場合、われわれのこの価値形成機構も、また、われわれの認識機構の場合と同様に、われわれが自らのうちに有している狭義の価値形成装置のすべてを含むものとして理解されなければならない。それは、われわれが先天的に有する身体的形態としての解剖学的構造、およびこの後天的変形、のみならず、われわれに生得的な機能様式としての狭義の価値形成の様式ないし型、そして、われわれが後天的に修得する狭義の価値形成の様式ないし型を含むのである。

われわれは、このような価値形成機構によって、われわれの経験において、狭義の価値を形成するのであるが、この場合、われわれが注意しておかなければならないことは、狭義の価値形成の場合には、経験が、対象観念形成の場合とは、異なる意味をもつことである。

対象観念形成の場合には、経験は、対象と対象観念形成機構との直接的交流を意味する。われわれは、これを、第一図のように示すことができるであろう。

第一図において、対象と対象観念形成機構との間の実線 \longleftrightarrow は、両者の交流を示す。ここで矢尻が実線の両端についているのは、対象と対象観念形成機構とが相互に作用することを示すためである。この交流は、われわれからいえば、より具体的には、われわれの対象観念形成機構からいえば、経験である。それは対象と対象観念形成機構との直接的交流であり、それゆえに、それは、いわ

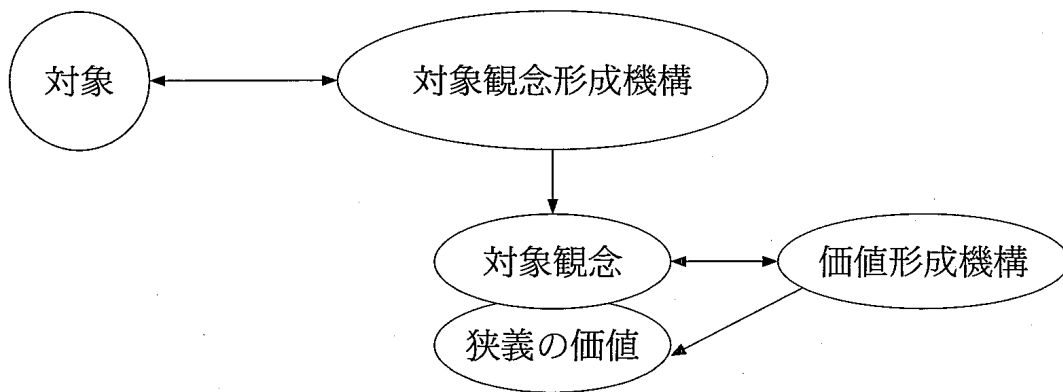


第一図

ば直接的経験である。

われわれの対象観念形成機構は、この直接的経験において、対象観念を形成する。対象観念形成機構と対象観念とのこの関係は、→によって示されている。

この場合、両者の関係には、対象観念から対象観念形成機構への作用も存在するのであり、このことを考慮するならば、両者の間の実線は、両端に矢尻をもつことになるのであるが、このことについては、ここでは、とくに触れないでおくことにしたい。



第二図

対象観念形成の場合に対して、狭義の価値形成の場合には、経験は、対象と価値形成機構との直接的交流ではなく、間接的交流を意味する。ここでは、価値形成機構は、対象観念を介してのみ対象と交流するからである。われわれは、これを、第二図のように示すことができるであろう。

第二図において、対象観念と価値形成機構との間の実線 \longleftrightarrow は、対象と対象観念形成機構との間のそれと同様に、両者が相互に作用することを示す。それは、対象観念と価値形成機構との直接的交流を意味する。けれども、それは、対象と価値形成機構との直接的交流を意味するものではないから、経験を、対象とわれわれとの直接的交流という狭い意味に解するならば、ここでは、もはや、われわれは、経験について語るができない。

だが、価値形成機構は、対象と対象観念形成機構との直接的交流において形成された対象観念と直接に交流する。それは、このことによって、すでに述べたように、対象と間接に交流するのである。したがって、経験という言葉は、対象とわれわれとの間接的交流をも含むものとして理解するとき、われわれは、対象と価値形成機構との間には、後者からみて、経験が、すなわち、間接的经验が存在するということができるのである。

このようにして、われわれの価値形成機構は、間接的经验において、狭義の価値を形成する。価値形成機構と狭義の価値とのこの関係は、実線 \longrightarrow によって示されている。

この場合、両者の関係には、対象観念形成機構と対象観念との関係の場合と同様に、狭義の価値から価値形成機構への作用も存在し、したがって両者の間の実線には両端に矢尻が付されなければならないのであるが、このことについても、ここではとくに触れないこととしたい。

なお、第二図において、狭義の価値が対象観念に接するように描かれているのは、前者が後者に付され、これと結合することを示すためであることは、もはや、いうまでもないであろう。

狭義の価値が、このように対象と価値形成機構との直接的交流においてでは

なく、対象観念と価値形成機構との直接的交流において形成されることは、狭義の価値の観念としての性質を、対象観念の場合よりも、一層明確にする。狭義の価値は、対象観念という観念に関わる観念であり、この形成は、専ら、人間の内部のいわば観念世界における過程だからである。一般に、対象観念が観念であることが理解され難いのに対して、狭義の価値が観念であることが理解され易いのは、一つには、両者のこのような性質の相違によるものである、ということができよう。

3-2 価値判断と価値形成

以上において、われわれは、狭義の価値の形成を、対象観念に付与される狭義の価値について考察してきた。われわれは、対象観念と価値形成機構との交流を問題とし、この交流において、狭義の価値が、価値形成機構によって、対象観念について形成され、これに付与される、と考えてきたのである。

このような考え方は、狭義の価値の形成に先立って、対象観念がすでに形成されて与えられていることを前提とするものであることが注意されなければならない。そこでは、対象と対象観念形成機構との交流において、対象観念が、対象観念形成機構によって、すでに形成されたものとして存在することを前提とし、つぎに、この対象観念と価値形成機構との交流において、狭義の価値が、価値形成機構によって、対象観念について形成され、これに付与される、と考えられているのである。

すでに形成され与えられている何らかの対象観念に対する狭義の価値の形成と付与は、価値判断 (Werturteil) または評価 (Wertung) と呼ばれようであろう。このうち、価値判断という言葉は、狭義の価値が形成され付与されるものが、事実としての対象そのものではなく、この対象についての観念であることの無理解はあるが、わが国の、とりわけ社会科学界において、一般的な用語となっている。それは、何らかのものごと (対象観念) にどのような価値 (狭義の価値) があるかの判断を表す言葉であるといつてよいであろう。そして、わ

が国における価値判断という言葉およびその用法のこの一般化が、M. Weberの考え方のわが国への紹介によって、生じたものであることは、いうまでもない。

価値判断という言葉が、わが国において、このように一般に流布しているにもかかわらず、わたくしは、以上において、あえて、価値判断という言葉を用いず、価値形成という言葉を用いてきた。その理由は、わたくしが、価値判断という言葉より価値形成という言葉を好むことによるわけではない。その理由は、わたくしがとりあげようとする狭義の価値の形成が、上記の価値判断に尽くされるものではないこと、ここにある。

われわれの価値形成機構は、何らかの対象観念の存在を前提とし、この対象観念との交流においてのみ、狭義の価値を形成するわけではない。われわれの価値形成機構は、何らかの対象観念との交流なくして、したがって対象観念の存在を前提とせずに、自ら、狭義の価値を形成することがある。そして、この場合には、価値形成機構によって独自に形成された狭義の価値が、対象観念形成機構に働きかけ、この機構との交流によって、狭義の価値を付与すべき対象観念を形成させることがあるのである。

われわれは、何らかの具体的食物がなくても、食欲を覚え、その後で、例えばスパゲティが食べたいと思うことがある。われわれは、さらに、特定の店のスパゲティが食べたいと思うかもしれない。

このような場合には、われわれは、何らかの対象について対象観念を形成し、この対象観念について狭義の価値を形成しこれに付与しているわけではない。すなわち、われわれは、眼前にスパゲティを見て、これについて対象観念を形成し、この対象観念について食欲を感じているわけでも、このスパゲティを食べて、これを美味しいと思っているわけでもない。

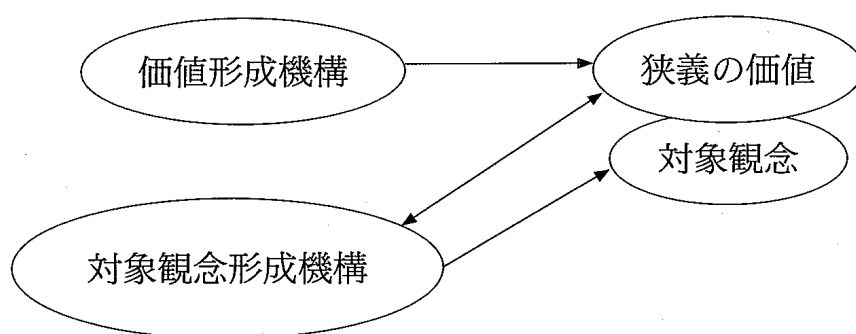
むしろ、われわれは、まず、自らの価値形成機構によって狭義の価値を形成し、つぎに、この狭義の価値の作用によって、われわれの対象観念形成機構を動かして対象観念を形成しているのである。ここでは、狭義の価値が、価値形

成機構によって、対象観念の作用を受けることなく、いわば独自に形成されることが注意されなければならない。

このように価値形成機構によって独自に形成される狭義の価値として、われわれは、さらに、より一般的に、われわれのうちに時に生じる得体の知れない欲求をあげることができるであろう。このような欲求とは狭義の価値であり、この狭義の価値は、自らを満たすことのできるものごとすなわち対象観念を捜し求めて、対象観念形成機構と交流する。その過程で、それは、いくつかの対象観念を形成させることになる。

われわれは、この過程が一つの創造の過程でもありうることに注意しておかなければならない。価値形成機構による狭義の価値の独自の形成は、創造の主要因なのである。

価値形成機構による独自の狭義の価値の形成、ここに形成された狭義の価値と対象観念形成機構との交流、そしてこの交流における対象観念形成機構による対象観念の形成を、われわれは、簡略的に、第三図のように示すことができるであろう。



第三図

このようにして、わたくしは、狭義の価値の形成について、二つを区別することができる。一つは、すでに形成されている対象観念についてなされる狭義

の価値の形成であり、価値判断ないし評価と呼ばれるものが、これである。もう一つは、対象観念の形成がすでになされていることを前提とせず、これと独自になされる狭義の価値の形成である。

わたくしは、すでに形成されている対象観念に対してなされる狭義の価値の形成すなわち価値判断だけでなく、これとともに、それ自体で独自になされる狭義の価値の形成をも、ここでとりあげることにしたい。それゆえに、わたくしは、この両者を表しうる言葉として、狭義の価値について、価値判断ではなく、価値形成という言葉を用いるのである。

このことを、わたくしは、つぎのようにいうこともできるであろう。すなわち、狭義の価値の広義における形成（広義における価値形成）は、すでに形成されている対象観念に対する狭義の価値の形成（価値判断）と、それ自体で独自になされる狭義の価値の形成（狭義における価値形成）とを含む、と。この関係を、わたくしは、簡略に、つぎのように表示することができる。

$$\text{広義における価値形成} \left\{ \begin{array}{l} \text{価値判断} \\ \text{狭義における価値形成} \end{array} \right.$$

そして、わたくしが、この論文において、価値形成というとき、わたくしは、とくに断らない限り、上表の広義における価値形成、すなわち狭義の価値の広義における形成を意味することとする。

3—3 価値形成機構と感覚機構

狭義の価値および価値形成機構について注意されなければならないこととして、わたくしは、さらに、それらが、しばしば、感覚および感覚機構と混同されることをあげることができる。

だが、狭義の価値および価値形成機構と感覚および感覚機構とは、まったく異なるものであって、両者は混同されてはならない。感覚および感覚機構は、

狭義の価値および価値形成機構ではなく、対象観念および対象観念形成機構だからである。このことを、わたくしは、以下のように説明することができるであろう。

狭義の価値および価値形成機構と混同され易いものとして、われわれは、例えば、甘い、辛いといった味覚と、この機構とを、あげることができる。甘い、辛い、さらには苦いといった味覚は、多くの場合、われわれに、直ちに何らかの感興を引き起こすのであり、このことから、このような味覚は、狭義の価値と混同され易いものの一つとなる。

だが、甘い、辛い、苦いという味覚は、狭義の価値ではなく、対象観念またはその要素であることが注意されなければならない。それは、より詳しくいえば、味覚的対象観念または対象観念の味覚的要素である。そして、この対象観念または対象観念の要素に、狭義の価値が対応する。この狭義の価値は、美味しさ、または、この負の状態としての不味さである。われわれは、一方で、甘さ、辛さ、苦さ、という対象観念またはその要素と、他方で、美味しさ、不味さ、という狭義の価値とを、明確に区別しなければならない。

味覚と狭義の価値との混同は、一つには、特定の味覚が、しばしば、美味しさまたは不味さに直ちに対応する傾向をもつことに起因するであろう。とりわけ子供にとっては、例えば、甘さという感覚的対象観念は、直ちに美味しさという狭義の価値を喚起するのであり、二つのもの間にみられる、このいわば即応関係が、味覚と狭義の価値とを混同させるのである。この混同は、先入観となり、われわれのうちに、味覚と狭義の価値とを混同する思考的習慣を、形成することとなる。

味覚と狭義の価値とを混同する思考的習慣は、一度形成されると、これが習慣であるがゆえに、容易には克服されえない。それは、われわれが、自らの成長につれて、美味しさという狭義の価値を、これまで不味さと感じられていた味覚、例えば辛さや苦さ、にも対応させるようになっても、簡単には克服されない。われわれは、大人になるにつれ、辛さや苦さ、さらには渋ささえをも、

美味と思うようになり、また、何らかの甘さを不味と思うようになることがあるのであるが、このような味覚と狭義の価値とのずれまたは不対応も、しばしば、両者が異なるものであることの明確な認識を、われわれに、与えることがないのである。

味覚と狭義の価値との相違は、一つには、後者の発展が前者の発展と関連しつつ生じることによって、われわれに認識され難いのもかもしれない。

われわれが、甘さだけでなく、辛さや苦さ、さらには渋ささえをも、美味と思うようになることは、われわれの狭義の価値の発展ないし洗練である。この狭義の価値の発展は、おそらく、単独に生じるわけではない。それは、味覚の発展ないし洗練と関連しつつ生じるものであるように思われる。

われわれは、ある料理のうちに、さまざまな味覚とその結合を認識することができるようになるのであるが、このことは、われわれの味覚的対象観念の発展である。そして、このように発展した味覚的対象観念について、われわれは、美味しさという狭義の価値を対応させていく。これが狭義の価値の発展である。このように対象観念と狭義の価値との両者が、関連しつつ、ともに発展するとき、われわれは、両者の相違に気づかないかもしれない。両者が関連しつつ、ともに発展するとき、両者間の齟齬は、上記の思考習慣に囚われたわれわれには、明らかになり難いからである。

味覚と狭義の価値との相違は、美味しさという狭義の価値が、味覚だけでなく、例えば、料理自体の外観、さらには料理を盛る器の外観、この器と料理との配合の外観、といった視覚的対象観念によっても左右されるようになるとき、さらに拡大する。美味しさという狭義の価値が、このように味覚的対象観念のみならず視覚的対象観念にも左右されるものであることを認めるとき、われわれは、当の狭義の価値と味覚とが同一でないことを自覚せざるをえないはずなのである¹⁾

味覚と美味しさという狭義の価値に関する以上の考察は、感覚と狭義の価値とが、そして感覚機構と価値形成機構とが、同一ではないことを、例示的に明

らかにするであろう。感覚は対象観念の一部であり、感覚機構は認識機構の一部であって、これらは、それぞれ、狭義の価値および価値形成機構から区別されなければならない。

3-4 対象観念に対する狭義の価値の発展

(1) 感覚的対象観念に対する感覚対応的狭義の価値の発展

味覚という対象観念に対する美味しさという狭義の価値に関する以上の考察は、同時に、また、狭義の価値が何らかの感覚と関連しつつ発展しうることを、例示的に明らかにするであろう。

わたくしは、何らかの感覚として形成される対象観念を感覚的対象観念と呼び、この対象観念に対応する狭義の価値を感覚対応的狭義の価値と呼ぶことにしよう。このとき、わたくしは、感覚対応的狭義の価値が感覚的対象観念と関連しつつ発展する、ということが出来る。

このような発展について、わたくしは、いくつかを区別することができる。その第一は、感覚対応的狭義の価値の内包的発展である。

例えば、美味しさという狭義の価値は、ある食物についての味覚的対象観念が、甘さだけでなく、辛さ、苦さ、渋さ、さらには、これらの微妙な状態を含むものへと発展するとともに、これに関連して発展する。この発展は、例えば味覚という特定の感覚種内部での対象観念の発展に関連する狭義の価値の発展であり、わたくしは、これを、感覚対応的狭義の価値の内包的発展と呼ぶのである。

わたくしは、これを、また、感覚対応的狭義の価値の内包的洗練と呼ぶことも出来るであろう。それは、特定の感覚種内部での対象観念の洗練に応じる狭

1) 美味しさという狭義の価値は、微妙であり、われわれは、いまだ、これを解明することは出来ない。この価値、そしてこの価値が付与される対象観念は、さまざまな文学者によって描写されてきた。だが、わたくしが知る限り、この狭義の価値と対象観念とは、かれらの夥しい言葉によっても、まだ、解明には程遠い状態にある。

義の価値の発展であり、このような狭義の価値の発展は、その洗練を意味する、と考えることができるからである。

感覚対応的狭義の価値のこのような内包的発展ないし内包的洗練が、味覚的对象観念に関連してのみ生じうるわけではないことは、いうまでもない。それは、他のさまざまな感覚種のそれぞれに関連しても、生じうるのである。

感覚的对象観念と関連する感覚対応的狭義の価値の発展の第二は、その外延的発展である。

例えば、美味しさという狭義の価値は、味覚という特定の一種類の感覚から成る感覚的对象観念に対応するものから、さらに視覚や嗅覚といった他の感覚種をも含む複数の感覚種の結合としての感覚的对象観念に対応するものへと発展する。われわれは、料理の味覚についてだけでなく、その香りというその嗅覚、その姿、それが盛られる器というその視覚をも含めた対象観念について、美味しさを感じるようになる。

一つの感覚種としての対象観念に対応する狭義の価値から、複数の感覚種の結合としての対象観念に対応する狭義の価値への、感覚対応的狭義の価値のこのような発展を、わたくしは、感覚対応的狭義の価値の外延的発展と呼ぶ。これは、複数の感覚種への拡張を伴う対象観念の洗練に対応する狭義の価値の発展であり、それゆえに、わたくしは、これを、また、感覚対応的狭義の価値の外延的洗練と呼ぶことができるであろう。

われわれは、ここで、感覚対応的狭義の価値の内包的発展と外延的発展とが、ともに、特定種としての狭義の価値の発展、ここでは美味しさという狭義の価値種の発展、についての区別であること、そして、この発展が、この狭義の価値種が結び付く対象観念の発展のあり方による区別であることに、注意しなければならない。それは、何らかの特定種の狭義の価値が、特定の感覚種としての対象観念の内部における発展に対応して発展するか、それとも、複数の感覚種を含むものへの対象観念の発展に対応して発展するか、による区別なのである。

感覚対応的狭義の価値のこれらの発展は、美味しさという狭義の価値種についてのみ問題となるものではない。それは、これ以外の狭義の価値種についても問題となりうるものである。

感覚的对象観念と関連する感覚対応的狭義の価値の発展として、われわれは、第三に、以上から、狭義の価値種の多様化を区別しなければならない。特定種としての狭義の価値の発展としての感覚対応的狭義の価値の内包的発展および外延的発展に対する新しい感覚対応的狭義の価値種の発現がこれである。

わたくしには、感覚対応的狭義の価値が、それ自体で、いくつかの種を形成しているように思われる。われわれは、例えば、主として味覚に関連する美味しさという狭義の価値種の他に、主として聴覚に関連する音楽的美しさという狭義の価値種、または、主として視覚に関連する絵画的な美しさという狭義の価値種を有している。われわれが有するこれらの狭義の価値種は、有機体としての人間の進化の過程において、われわれのうちに形成されてきたものである。われわれは、ここに、狭義の価値種の多様化、この意味における狭義の価値の発展、を考えることができる。

感覚対応的狭義の価値のこの意味での発展は、もちろん、感覚的对象観念それ自体の発展と関連しているであろう。しかしながら、この発展の様相は、わたくしには、いまのところ不明である、としかいいようがない。

もっとも、すでに美味しさという狭義の価値種について例示したことから推測されうるように、特定の狭義の価値種は、必ずしも、特定の感覚種に対応して、直ちに発現するわけではないであろう。狭義の価値は、何らかの新しい感覚種が発現するとき、少なくとも、直ちに、これに対応する新しい狭義の価値種を生み出すのではなく、むしろ、すでに存在する狭義の価値種の外延的発展によって、これに対応するものと思われる。ここには、特定の狭義の価値種と特定の感覚種との非対応が発現する。

この非対応は、新たに発現した感覚種が、当該有機体種において一般的となり、また、そのうちに複数の感覚要素を含むにつれて、すなわち、感覚種がい

わば量的、質的に発展するにつれて、その過程の何らかの段階において、この感覚種に対応する新しい狭義の価値を生み出し、このことによって解消されることになるのであろう。

(2) 非感覚的対象観念と感覚非対応的狭義の価値の発展

他の有機体種と比べ、人間についてとりわけ際立つものは、感覚とはせいぜい間接的に関わるにすぎない、またはほとんど関わりをもたない対象観念と、これに対応する狭義の価値の存在であろう。われわれは、ここに、感覚と関連を有しない対象観念としての非感覚的対象観念とこの対象観念に対応する感覚非対応的狭義の価値とを理解することができる。

非感覚的対象観念は、例えば、ある種の道徳ないし倫理を構成する対象観念、またはある種の思想ないし宗教を構成する対象観念のうちに見出されうるであろう。感覚非対応的狭義の価値は、これらの対象観念のうち非感覚的対象観念が見出されるとき、例えば、これについて形成されることによって成立することとなる狭義の価値である²⁾

われわれは、感覚非対応的狭義の価値についても、これが、非感覚的対象観念の発展と関連して、発展してきたものと推測することができるであろう。

狭義の価値は、おそらく、まず、有機体の生存に密接に関わる少数の範疇について発生し、その後、次第に多様化してきたものと推測されうる。それは、この過程において、最初に、何らかの単純な感覚的対象観念と直接に関連する感覚対応的狭義の価値を発生させ、感覚的対象観念が、より複雑な感覚的対象観念を含むものへと発展するとともに、これに対応して発展したものであろう。

2) わたくしは、感覚的対象観念と感覚対応的狭義の価値、非感覚的対象観念と感覚非対応的狭義の価値が、いずれも一種の理想型であることを注意しておくべきであろう。ここでは、理想型が、何らかの分類基準ではなく、尺度であることが、とくに留意されなければならない。このことについては、とりわけ、つぎを参照のこと。

拙稿「理想型による認識と分類による認識——「理想型」による認識と経営経済学の学派分類(三)——」『松山大学論集』第7巻第1号、1995年4月。

狭義の価値は、対象観念が、やがて、感覚と関連しない要素をももつ対象観念をそのうちに含むようになり、さらには、感覚と関連しない要素のみからなる対象観念をもそのうちに含むものへと発展するにつれて、これに対応して発展する。狭義の価値は、感覚的对象観念に対応する狭義の価値のみならず、非感覚的对象観念に対応する狭義の価値をも含むものへと発展していく。

対象観念が感覚的对象観念から非感覚的对象観念へと発展するとき、われわれは、ここに、対象観念の発展における一種の抽象の水準の高度化を理解することができるであろう。そして、また、われわれは、対象観念のこのような変化に対応する狭義の価値の変化のうちに、狭義の価値の発展における一種の抽象の水準の高度化を理解することができる。ここに狭義の価値の抽象の水準の高度化とは、後にも述べるように、狭義の価値が、より高次の抽象の水準にある対象観念に対応していくその性質の変化を意味する。